

『オーストラリア多文化社会論 移民・難民・先住民族との共生をめざして』

関根政美、塩原良和、栗田梨津子、藤田智子 編著

国際領域 上席主任研究官 玉井 哲也



『オーストラリア多文化社会論
移民・難民・先住民族との共生
をめざして』

編著／関根政美、塩原良和、栗田
梨津子、藤田智子

出版年／2020年
発行所／法律文化社

日本で暮らす外国人人口は今後更に増加して、日本も多文化社会になることが予想され、国や地方自治体でも多文化共生の推進を標榜するようになっていきました。こうした状況に鑑み、多文化共生を実践している国の理念・政策・経験・社会的影響などから、見習うべき点や課題を考察するべく、オーストラリアを対象にまとめられたのが本書です。

本書は、1788年からの英国系白人入植以後を中心に、オーストラリアにおける近代西欧的な主流文化とそれ以外、特に非欧州系の移民と先住民（アボリジニ）との関係から多文化共生、多文化社会を論じています。

白人が人口の多くを占めたオーストラリアは、19世紀末から白豪主義を掲げ「白人社会」を国づくりの理念としました。しかし、1970年代に宗主国である英国がECに加盟すると、アジア・太平洋国家として生きていくことが必要となり、環太平洋地域との関係拡大の妨げとなる白豪主義をやめ白人社会への同化主義を否定して、文化的に多様な人々を積極的に評価し活用する、多文化主義（マルチカルチャリズム）に転換しました。多くのアジア系の移民、難民を受け入れ、定住支援・社会参加促進、多言語放送局SBS創設など多文化共生を支援する様々な施策も導入し、入植以来、土地を収奪し無視し続けてきた先住民とも和解プロセスを始めました。

しかしながら、多文化社会は必ずしも順調に発展したわけではなく、批判や反動に遭遇してきました。近年の例として、庇護希望者を上陸させず南太平洋の第三国で収容・難民審査を行う「パシフィック戦略」などが紹介されます。移民省の経過は象徴的です。1945年に移民省として設置され、1975年に移民・エスニック問題省に改称以後、エスニック又はマルチカルチュラルの文字を含んでいましたが、2007年、移民・シティズンシップ省に改名、2013年には移民・国境警備省に省名変更され多文化主義との距離が更に拡大、2017年には、内務省に吸収されて移民省は消滅してしまいました。

多文化主義が後退した要因として、1990年代以後新自由主義の影響が強くなり経済的利益に資することと自立を求めて移民への公的支援を削減したこ

と、2001年の米国での同時多発テロ事件以後テロ事件が増え「イスラム嫌悪」が拡大したこと、などを挙げていきます。多文化共生が陥る「多文化共生→多文化競争→多文化凶生→多文化矯正→多文化強制」というサイクルも指摘されます。

このように、オーストラリアが、多文化主義を掲げ、様々な人種や民族が独自の文化を保ちながら共存するに至るまでの道は平坦ではなく、最近では明らかな後退も見られます。地方政府レベルでは、なお多文化主義の継続意欲が強いとされ、連邦政府首相も2017年にオーストラリアを「世界で最も成功した多文化社会」と宣言するなど多文化重視は掲げ続けており、また、欧米と異なり、反移民、反多文化主義、反イスラムの極右ポピュリスト政党が大きな勢力にはなっていないということで、多文化共生の「優等生」の面目をなんとか保っているものの、今日の多文化社会も必ずしも安泰とは言えないようです。

本書で経緯や背景が詳しく描かれているオーストラリアの経験からは、多文化共生は際どいバランスの上に成り立つものであり、その維持も容易でないことが示唆されます。「ダイバーシティの推進」「多文化共生」を掲げるには、相当な覚悟を要することが痛感されます。

本書は、序章、終章を含め18の章から成り、多文化社会オーストラリアに関連するテーマを研究する16人の著者が分担執筆しています。大学学部レベルの学生に、オーストラリアについて学ぶ基礎的知識を提供することを目的の一つに挙げていますが、各章に、キーワード解説があり、細かな「脚注」「章末注」は付けず、巻末の引用・参考文献とは別に各章末に掲げられた「さらに学びたい人のための文献」は、おおむね日本語文献です。オーストラリアの文学や日本人とオーストラリアとの歴史的なかわりも描かれています。一般読者の入門書としてもお勧めできる一冊です。